

モダニズム建築のメッセージ 21

16年ぶりになるだろうか。梅雨明けの厳しい日差しが照りつける中、法政大学の市ヶ谷キャンパスに立ち寄った。なぜ久方ぶりだったのかと言えば、その後の再開で激変した風景と対面するのが怖かったからである。1994年当時は、前川國男の「神奈川県立図書館・音楽堂」(1954年)が保存問題に大きく揺れており、坂倉準三の「神奈川県立近代美術館」(1951年)や前川の「晴海高層アパート」(1958年/1997年解体)など、1950年代の近代建築の多くが危機的な状況を迎えていた。そんな中、建築雑誌上で、「戦後近代建築との対話」と題する特集に加わる機会があった(『建築文化』1994年9月号)。その際、取り上げたのが、大江宏(1913~89年)の戦後初期の代表作で実質的なデビュー作として知られる「法政大学」である。竣工年から、「53年館」、「55年館」、「58年館」、と名づけられた一連の校舎群のうち、「53年館」は、当時すでに閉鎖されており、翌1995年に解体されてしまう。それでも、白い壁と黒いスチール・サッシュの織り成す幾何学的な外観と骨太なコンクリート打放しの構造体から構成された校舎群は、清新な姿で輝いていた。インターナショナル・スタイルで統一された建築が東京の都心にあること自体、新鮮な驚きだった。大江の印象は、「角館町伝承館」(1978年)や「国立能楽堂」(1983年)に代表されるように、和風の近代建築を手がける建築家だと勝手に思い込んでいたからだ。なぜ、彼はこのようなみずみずしい近代建築を試みたのだろうか。ここでは、大江の出発点を振り返り、この建物に託されたものとは何か、について考えてみたい。

清新な校舎に戦後精神を託して

法政大学55・58年館

竣工:1955・58年

設計:大江宏

松隈洋

まつくま・ひろし | 京都工芸繊維大学教授
1957年兵庫県生まれ。1980年京都大学工学部建築学科卒業。同年前川國男建築設計事務所入所。2000年京都工芸繊維大学助教授、2008年10月より現職。著書に『ルイス・カーン—構築への意志』、『近代建築を記憶する』、編著に『前川國男 現代との対話』など



左上 | 正面外観。格調高く美しい白と黒のコントラスト

左下 | 学生ホール。禅寺のような簡素な空間

右上 | 廊下。独特な雰囲気を出しているコンクリート打放しの丸柱と露出されたスチールのフレーム

右下 | 58年館北西側のスロープと前庭。ここだけは違う時間が流れている (撮影:2010年7月2日)



国際建築へのあこがれ

「明治神宮宝物殿」(1921年)を設計した内務省の建築技師、大江新太郎(1879~1935年)を父に持つ大江が、東京帝国大学建築学科に入学したのは1935年、おりしも、ル・コルビュジェに学んだ前川國男がレーモンド事務所から独立する同年である。同級生には、丹下健三(1913~2005年)や浜口隆一(1916~95年)らがいた。また、同年には「土浦亀城自邸」も竣工している。そんな時代に、大江が心惹かれたものは何だったのだろうか。それは、後年、「無色透明みたいな、あのデッサウみたいなクリアで清潔な、というレベルのものに、ぼくはインターナショナル・アーキテクチャの姿を見ていた」(大江宏「小対話篇 ある青春—建築的風景1930年代」『風声』8号1979年)と語ったように、W. グロピウスの「パウハウス・デッサウ校舎」(1926年)に代表される、草創期の工業化への信頼を前提とした軽快で明晰な近代建築であった。この言葉を裏づけるように、1938年、丹下、浜口と共に仲良く辰野賞銅賞を受賞した卒業設計の「工作文化連盟館」も、同時代に構想されたミースの「イリノイ工科大学」を先取りするような、直線を基調とする先駆的なデザインでまとめられており、後に実現する法政大学を髣髴とさせる。しかし、それほどあこがれた近代建築実現への道程は、戦争によって阻まれていく。大江は、当手を振り返って、次のように回想している。

「私が、現実的に建築をつくることに本格的に取り組むことができたようになったのは、今世紀の後半期に入ってからのものであり、それは私が

建築学科を卒業して約15年ほど後のことである。いうまでもなくその期間は戦前・戦中・戦後にまたがる不幸な15年間であり、およそ建築をつくることに真向から取り組もうような環境にはなかったからである。戦後はじめて現実に建築に取り組めるようになったその当初、最も強かったのは多年にわたって悲願しつづけてきた西洋近代を、その申し子たる近代建築をこの地・日本に再現したいとする執念を、ここに現実に果たす時がきたという気負いであった。」

(大江宏「ものつくりの正体」『建築文化』1975年4月号)

ここからも読み取れるように、大江が戦争で中断を余儀なくされた近代建築への思いを注ぎ込んだのが、この法政大学だった。そして、そこには、図らずも、戦後、法政大学が新制大学として再出発するにあたって、戦争を遂行した時代と決別し、今度こそ自由な学園を築きあげようとする、総長の大内兵衛らを中心とする人々の共有していた願いも重ねられていく。こうして、大江は、1951年に設計に着手し、7年の歳月をかけて、戦後民主主義の時代にふさわしい大学キャンパスを実現させることになる。

近代建築理解の深化

ところで、興味深いことに、大江は、法政大学の設計を通じて近代建築への理解を深めつつ、その建設途上で当初の考え方に修正を加えていく。晩年、当時を振り返って次のように記している。

「当時、これだけの規模のものをつくることは、財政的にもまた材料、特に鉄骨材を得る上でも困難な時期でしたから、5年の年月を要したのです。5年の間に私自身の中に心理的変化が起こってきます。それは、1954年の北



および南アメリカ、ヨーロッパ旅行以降、私の中に内在していたいろいろな疑問が表面化してきて、それを解明するプロセスの中で葛藤があったからです。全体計画は旅行前に完成していましたが、外観はインターナショナル・スタイルを踏襲した形、つまりカーテンウォールを用いて明るく軽快なデザインで統一していますが、私の内的変化を密かに表しているのが学生ホールの内部と、飛石を配したその前庭です。

コミュニティホールと食堂で構成される学生ホールは南禅寺の伽藍を、いわばインターナショナルの定義からいえば異質のものを心中密かなモチーフとしています。」

(別冊新建築『日本現代建築家シリーズ』大江宏 1984年)

この言葉通り、1958年に全体が完成した校舎は、インターナショナル・スタイルを基調としながらも、それだけでは捉えられない質感を内包する。中でも、東西に細長く伸びる校舎の中央部分に直行する形で貫通する学生ホールと北西角の前庭は、学生の交流の場として独特な陰影と存在感を持つ空間になっている。そこに、大江の「内的変化」があったのだと思う。それは、高度成長に伴って急速に展開し始めた近代建築が、いつしか当初持っていた人間を中心に据える精神を忘れ、効率化と経済性の追求に陥っていることへの危機感として自覚されたものだったに違いない。竣工から数年後、大江はその思いを次のような言葉にしている。

「自ら建築家と名乗る以上は、あくまでも人間の側に立ってその生活の場の独立を防衛し、個人が喪失しようとしている自主性を積極的に回復すべき方向にその社会的職責を明確に自覚すべきである。そのためには、時として巨大主義、超企業主義、あるいは機械主義に対して抵抗し、また他の専門分野の技術者とはするどい対立関係に立たねばならぬきびしい立場こそ、今後われわれ建築家に与えられるべき本格的な社会的地位であることを覚悟すべきであろう。産業革命以来、非生産的、かつ非合理的であったそれまでの建築に対して強く抵抗する原動力となった機能主義によって近代の建築家達はすでに十分その社会への職責を果たしおせた。しかし今日事態はすでに一変し、再度われわれの役割は、いま進みつつある時勢に乗ることではなく、逆に抵抗することであるということをはっきり知らなければならぬ時機にきたようである。」

(大江宏「建築の本質」『建築文化』1962年9月号)

大江の問いとは裏腹に、法政大学市ヶ谷キャンパスのこの10年の変化は著しい。2000年には、「53年館」跡地に27階建ての「ボアソナード・タワー」が建てられ、2007年には、学生サークルの活動拠点として知られた「学生会館」(河原一郎設計・1973年)が取り壊されて、巨大な「外濠校舎」へと生まれ変わった。そして、先ごろ、残る「55年館」と「58年館」の取り壊しが決定されたという。けれども、今回訪れてみると、大江の遺した校舎は隅々まで美しい状態に保たれて息づいていた。そこに、時代の流れに抗して、校舎に託された大江の思いと大学の戦後精神を守ろうとする人々の強い意志を感じた。その清新な姿を憶えておきたいと思う。

